

異世界でカフェを開店しました。

# 登場人物 紹介

エドガー殿下

フェリフォミア王国王太子。

好きな食べ物：ハンバーグ

ギルフォード

リサの異世界での養父。

好きな食べ物：シチュー

アナスタシア

ギルの妻。

好きな食べ物：カルボナーラ

ジーク

リサのスイーツに惚れ込み、  
騎士からカフェの従業員に。

好きな食べ物：プリン

キース

王宮の専属副料理長。

好きな食べ物：から揚げ

ヘレナ

リサの店のウェイトレス。

好きな食べ物：アイスクリーム

リサ(黒川理沙)

ひよんなことから異世界でカフェ  
を開店することになった元OL。  
食文化発展のため、  
地球のごはんを作りまくる!!

好きな食べ物：和食

バジル

緑の精霊。体長約20cm。

好きな食べ物：卵焼き



## 目次

異世界でカフェを開店しました。	7
可愛い娘ができました。	235
彼女はこうしてやってきました。	245
ある少年の邂逅	253

異世界でカフェを開店しました。

## プロローグ

「聞いてよ、リサちゃん」

「はいはい、聞いてますよ」

立派な一枚板のカウンターに一人の壮年男性がだらしなく俯せ、カウンターの途中で忙しげに働く店員の女性にくだを巻いていた。

憂鬱な表情は少し長めの髪によつて隠されているが、その間からシルバーグレーの瞳が覗いている。

彼は、ギルフォード・ハイド・クロード。この態度からは想像できないと思うが、このフェリフオミア国の筆頭王宮魔術師という肩書きを持っている。

この国を司る部署は大きく分けると、文官省、魔術省、騎士省の三つだ。

その中の一つ、魔術省をまとめあげるポジションが筆頭王宮魔術師であつて、この男性こそがそんな栄誉ある肩書きを持つ人物なのであつた。

一方、その相手をさせられている彼女の名は、リサ・クロカワ・クロード。

長い黒髪を邪魔にならないように後ろで一本に束ね、この店の制服らしい白いドレスシャツと黒いエプロンを身に着けている。彼女は、姓からわかるように、彼、ギルフォードの縁者である。た

だし、血は繋がらない養女であるが。

「僕だつて、がんばつて働いてるのに……そもそも筆頭王宮魔術師になつたのも休みが多くなるって言われたからなのに、なつてみたら全然休めないじゃないか！ シアとデートする時間もない！ このままじゃシアに愛想を尽かされてしまうよう……ねえ、リサちゃんどうすればいいと思う!?」

「それほどギルさんが重要な役職についてるつてことでしょ？ それにシアさんはそんなことで愛想尽かしたりしませんよ」

「そうかな？」

「そうです。それよりもこんなところでサボつていいんですか？ 職場のみなさんが困つてるんじゃないですか？」

リサはいつもの光景に呆れつつ、養父をたしなめる。

養女の様子を見ると口実で、たびたびこの店を訪れるギルフォードだが、実は体の良いサボり場所になっていることを、彼女は知っていた。

けれど、相手はお世話になつている養父で、そのうえ今はお客の一人。そのため、しょうがないと思ひながら相手をしている。

ただ、そんな穏やかな時間も今だけだ。

カウンター横の出窓から、店の前に馬車が停まったのを視線の隅に捉えたりサは、今日もその時間がやってきたことを知る。

カランコロンというドアに付いているベルの音と共に、一人の男性が店内に入ってきた。

その男性はカウンター席に座るゴルフフォードに目を留めると、につこりと笑みを浮かべた。「ごきげんよう、ゴルフフォード。こんな日に城下で会うなんて奇遇ですね」

顔は笑っているが目が全然笑っていない。彼が一步一步近寄るたびに、ゴルフフォードの顔はみるみるひきつっていく。

「……や、やあロイズ、君もリサちゃんのお菓子を食べに来たのかい？ あ、それとも遅い昼食かな……？ アハハ、ハ……」

先ほどまでのリラックスした態度とは打って変わり、びくびくしながら返答するゴルフフォード。一見、和やかな会話のようだが、彼らの間に流れている空気は穏やかとはとても言えない。

「あいにく、私はまだ業務中です。本来ならば、本日の自分の仕事は終えている時間なんです、他の部署の可哀想な役人達から泣きつかれたもので……」

彼は顔に張り付けていた笑みを取り払い、右手でメガネをくいとあげた。

ゴルフフォードにロイズと呼ばれた彼、ロイズ・ウオーロックは、ゴルフフォードの同僚であり、数少ない友人の一人だ。

次期宰相とも噂されるロイズは、文官省の長官を務めている。

そんな彼が昼間にわざわざ城下のお店にやってくる理由は一つしかなかった。

「君の部下達は、誰かさんのせいで忙しすぎて、外にも出られないようですね。彼らがあまりに哀れなので、代わりに私が迎えに来たのですよ」

無表情で話すロイズから、どうにかして逃げだそうと腰を浮かせたゴルフフォードだったが、瞬時

に襟首を掴まれ、なんなく捕獲される。

「貴様のサボり癖はいつになつたら直るんだ！ そして何度言つたらわかるんだ！ まったく良い歳して学院の頃から成長せんのか！」

このやりとりは普段から交わされているらしい。ロイズの文官とは思えない素早い身のこなしと、慣れた手つきに、リサは同情の念を感じた。

いやだ、戻らないと子供のように駄々をこねるゴルフフォードを、ロイズは鋭い一瞥で黙らせると、店の前に停めてある馬車へ彼を連行した。

襟首を掴まれた猫のように、ぴたりと静かになったゴルフフォードの背中からは、哀愁が漂っていた。「では、リサ嬢、皆様、お騒がせ致しました」

再び店内に戻ってきたロイズは、店主のリサと、その様子を遠巻きに見ていた店内の客に礼儀正しく一礼する。

「こちらこそいつも養父がすいません。よかつたらこれ、休憩のときにでも召し上がってください。あと養父の部下の方達にも」

「ありがとうございます。リサ嬢のお菓子はおいしいので、ありがたく頂きます」

養父の友人の苦勞を慮り、申し訳なさでいっばいになったリサは、せめてものお詫びとして、彼にクッキーが入った包みを手渡したのだった。

リサの内心を察したのか、ロイズは苦笑しながらその包みを受け取ると、再度一礼し、店を出ていった。

静かになった店内は、ようやくいつもの穏やかな屋下がりの空気を取り戻す。空いたお皿を下げ、追加のオーダーを取りながら、リサも再びカフェの業務に勤しんだ。

ここはフェリフォミア王国、王都の城下にひっそりと佇む「カフェ・おむすび」。珍しい名前のそのお店は、食べたことも見たこともないおいしいお菓子と、絶品料理を出す不思議なお店だ。

それもそのはず、そのお店の店主は、別世界の日本という国からやってきた異世界人なのだから……

## 第一章 ここはどこでしょうか？

私、リサ・クロカワ・クロードこと、黒川理沙がこの異世界へやってきたのは、今から約二年前のことだ。

日本のごく平凡な田舎町のごく一般的な家に生まれた私は、ごく普通の短大を卒業し、就職を機に上京。中小企業に事務職として採用された。

そして、その会社で勤続二年目を迎え、二十二歳になった翌日。

——私は、なんの前触れもなしに、異世界へやってきた。

……あー、なんか体が痛い。

右半身に鈍い痛みを感じた私は、意識を取り戻した。ベッドで寝ていたはずなのに、下に面している右半身から受ける感触が至極固いのはなぜだろう。

そして、緑のおいがする。私の部屋には観葉植物はおろか、花さえ飾っていないのに。

重い臉をゆっくり開けると、そこは森の中。なんと私は地面に横たわっていたのだ。都会の喧噪もなく、聞こえてくるのは、時折さわさわと風に揺れる木々の葉擦れの音だけ。

「……ここ、どこ？」

お決まりのセリフを呟いてみる。

もちろん返ってくる声はない。

とりあえず、状況を確認。地面から体を起こし、周りを見渡してみる。

服装は昨日眠ったときの部屋着。持ち物はないが、ルームシューズを履いているため、裸足ではないことが唯一の救いかもしれない。

現在位置は不明。人の気配はなく、動物の気配もない。

一通りの状況を確認し終える。

さて、どうしようか。

何も持っていない以上、生きるためには水と食料と身の安全を確保しなければ。ここはどこかとか、なんでこんなところにいるのかとかは、とりあえず置いておく。

人間、窮地に陥ったときは意外に冷静なものだ。

とにかく、いつまでも森の中にも埒があかないと結論付け、まずは人里を目指そうと決めた。一人脳内会議を終えた私は、立ち上がって衣服についた土を払い、歩き始めた。なんとなく、北っぽい方向を目指して。

——と、そんな感じで歩き出した私が、人里近くの街道に辿りつくのはその二日後。そこで意識を失った私が、運良く通りがかった夫婦に拾われ、目を覚ますのがそのまた翌日。楽天的にテクテクと歩き出した私は、そんな未来を知る由もなかった。

## 第二章 拾われたようです。

「……全然、人里に着かない……」

とりあえず人里を目指そうと決めたはいいが、歩けど歩けど木、木、木……  
いつこうに変わり映えのしない風景を眺め続けて、既に一昼夜経過していた。

昨夜、日が暮れてしまったときはぞっとした。着の身着のままの姿で、野宿することになるとは思ってもいなかったのだ。

もちろんそんな状況で眠れるわけがなく、とりあえず身の安全のため、大木の根元にうずくまり、じつと朝が来るのを待っていた。

暗闇の中、月明かりがこんなに明るいことに初めて気付かされた。だって現代の日本では、月し

か明かりがないなんてことは考えられない。

夜であろうと数メートルおきに電灯があるし、二十四時間営業しているコンビニもある。新宿や渋谷では、大きな広告が夜中でも途切れることなくピカピカ光を放っている。

しんと静まっている森に、不安が湧き起こってくる。

なぜこんなところにいるのか。

私は本当に帰れるのか。

もしかして普段の行いが悪いせいで、罰があたったのだろうか。

長い悪夢を見ているんじゃないか。それなら早く覚めてほしい。

なぜ、どうして……

さまざまな考えがグルグルと頭の中を巡る。だが答えは出ない。

風に揺れた木々の、ざわざわという音にいちいち身構えてしまう。

その度に、獣が茂みから飛び出してきたらどうしようとか、幽霊が出てきたりしたら……とか、次々悪い考えが浮かんでくるが、頭を振って吹き飛ばす。

ようやく顔を出した朝日に感謝し、今日こそはと決心して歩き出した。

けれど、その思いもむなしく、二日目も人里に辿り着くことは出来なかった。

深い絶望を感じながら、前日と同じように木の根元にうずくまり、朝が来るのをじつと待つ。

ところが、二日間歩き通して疲労困憊の体は、自然と睡眠を求め、私はいつの間にか眠ってしまった。



「……」  
「……まの……て」

耳元で誰かが囁いている。

意識がはつきりし始め、私は重い瞼をあけた。

「あ、起きた」

目の前の『何か』と視線が絡む。

「……っひい！」

幽霊!? と思った私の口から、思わず悲鳴が漏れた。

震える足で後ずさるが、すぐ後ろの大木にぶつかってしまう。

「起きたね」

「起こしちゃったね」

「何かびつくりしてるよ」

小声だが、静まり返った森の中ではしつかりと聞き取れる。

目だけできよろきよろ辺りを窺っても私の他に人はいない。

とすると、声の主は目の前のこれなのか。

「……もしかして、妖精ってやつ……?」

二十センチくらいの体でふわふわと宙に浮かんでいる姿は、おどぎ話に出てくる妖精そのものだった。

「妖精？」

私の言葉を繰り返したそれが首を傾げた。

「僕たちは精霊だよ」

「……精霊？」

「そう、精霊」

「自然と人と女神様を繋ぐ存在」

目の前にふよふよと浮かぶ三人？ 三匹？ の精霊が私の問いに、交互に答える。

ちよつと待って、落ち着け私。

精霊の存在はわかった。

でも、なんで私の前にいるの？

何が目的？

もしかして私をこんな森の中に連れてきて置き去りにしたのは、こいつらなんじゃ……？

「私を連れてきたのはあなたたち？」

「違うよ」

「女神様だよ」

「女神様？ その女神様とやらが私をこんなところに連れてきたの？」

「そうだよ」

「なにそれ！ 君たちその迷惑な女神様とやらの知り合いなら、その人に伝えてくれない？ 私を

元の場所に戻って！」

森の中にポツンと取り残され、さまよい歩くこと二日間。

何度帰りたいと思っただろう。

こんなところに連れてこられなければ、暖かいベッドで安心して眠っているはずなのに、私は暗い森の中で不安と孤独に震えていたのだ。

怒りがふつふつと湧いてきて、私は目の前の精霊たちに詰め寄った。

しかし、彼らは首を振る。

「何で？ 連れてきたなら帰せるはずでしょ！ 女神様に会わせてくれたら自分で言うから！」

必死に言いつのつても、精霊は悲しそうな表情をして、黙って首を振るだけ。

「ごめんなさい、これは決められたことなの。女神様も出来ない。世界を越えられるのは一度だけ……」

精霊たちの内の一人が前に進み出て言った。

他の子より少し体が大きくて、緑の髪をしたこの女の子が、グループのリーダーらしい。

「——待って、今、世界を越えるって言った？ それって……」

「そう、ここはあなたの生まれた世界とは別の世界」

「……」

その言葉に、絶句してしまう。

違う世界？ なにそれ、何で——

「ごめんなさい。でも、街に案内するよ」

私は茫然としたまま、とりあえず森を出たいという思いだけで、その申し出を受け入れた。

精霊に先導されて何もない森の中をひたすら進む。

本当に街へ連れて行って欲しくてのかわからないけれど、今の私には彼らについて行くしかない。

私の気持ちを慮ってか、何も言わずに前をいく精霊に尋ねてみる。

「ねえ、本当に私は帰れないの？」

いい加減しつこいと思うが、私にとっては重要な問題だ。すぐ諦められるものではない。

「……はい。出来ません。別次元の世界同士はお互いに干渉しません。干渉は世界のバランスを崩し、世界の崩壊に繋がるから……」

「じゃあ、なんで私はこの世界に連れてこられたの？」

「——それは、女神様の思召しです。この世界にはあなたという存在が必要なのです」

「勇者とか、神子とかそういうのになれたいの？ いや、無理だから。超人的な力も、天才的な頭脳も私にはないよ」

「そうではないです。大丈夫、あなたは普通に楽しく暮らしていればいいんです」

うれしそうな表情で精霊は言った。

なにがうれしいのかよくわかんないけど、重大な使命がないことに、少しほっとする。

まだ納得出来ないことは多いし、精霊が言うことの真偽も定かではないが、彼らからは私への好

意のようなものを感じる。

私は徐々に精霊たちに心を開いていった。

街道に辿り着いたのは、夜が明ける頃。

「ここをまつすぐ進むと、小さな町があります」

「……町まで、あと少し——」

輻がついた地面を目にし、精霊が指さす方向を見る。

ようやく、と思ったところで、急に目の前が白くなる。

あれ、と思ったときには、私は意識を失っていた。

次に目が覚めたとき、私は固い森の地面の上ではなく、知らない部屋のベッドの上にいた。体を起こすと、ずれた掛け布団から覗いた体には、ゆったりとしたワンピースのようなものが着せられている。

きよろきよろと部屋の中を見渡すとサイドテーブルに、私が森で着ていた部屋着がきれいに畳まれて置かれていた。しかも、誰かが洗濯してくれたのかきれいになっている。

私の部屋のベッドの二倍はあるかと思われる大きなベッド。右には猫足のソファセットに、白いテーブル。

その向こうにあるアーチ状の窓からは、暖かな日差しが差し込んでいる。

私の住んでいたアパートの何倍!? と思えるほど広い。

豪華な内装に、ここはどこのお金持ちのお家なんだろうと思う。

——ガチャ。

部屋のドアが開く音がして振り向くと、ふくよかな中年の女性が入ってきた。

「まあ、気付かれたのですね! お加減はいかがですか?」

ベッドサイドにやってきて、心配そうに尋ねてくる。

この人が助けてくれたのだろうか?

「体は大丈夫です。あの、私を助けてくれたんですか?」

「旦那様と奥様が介抱してくださいましたよ。一日ずっと眠っていらしたので、心配なさっておられました。お呼びして参りますね」

彼女は柔らかに微笑むと、私をベッドに寝かせ、部屋を出ていった。

しばらくすると、ドアをノックする音がした。

返事をする、先程の女性の後ろに、夫婦と思われる男女がいた。

「具合はどうだい?」

「ずっと目を覚まさなかったから、心配していたのよ」

夫婦はベッドの側に椅子を持ってきて、私の身を気遣うように話しかけた。

「助けてくださってありがとうございます」

ベッドに入ったままでは失礼かと思って立ち上がろうとすると、それを制されたので、そのままの姿勢で私は頭を下げた。

「街道に倒れていたのを見つけたときは、びっくりしたよ」

「お医者様に見てもらったら、疲労と脱水症状だっておっしゃってたわ。大きなケガはなかったみたいで安心したけど……今は平気？ クラクラしたりしない？」

「はい、大丈夫です。ありがとうございます」

「それなら良かった。——ああ、申し遅れたね。僕はギルフォード・ハイド・クロード。こちらは妻のアナスタシアだ」

「アナスタシア・アシユリー・クロードよ。あなたのお名前を伺つてもいいかしら？」

「私は、黒川里沙、あ、リサ・クロカワと言います」

二人にならって、名・姓の順で名乗りなおした。

「リサちゃんと言うのか、よろしくね」

笑顔で握手を求めてきたギルフォードさんの手を握る。

精霊達にここが異世界だと聞いてもなかなか信じられなかったが、ギルフォードさんと、アナスタシアさんを見て納得した。

なぜなら彼らの髪と瞳の色が、元の世界ではあり得ないものだったからだ。

アナスタシアさんは、ピンク色のパーマがかかった髪に、アメジストのような紫の瞳。ギルフォードさんの髪は見慣れた茶色だったが、瞳の色はシルバーグレーだった。

髪と目は生まれつきなのか聞いてみると、そうだと言われた。

そして、私にも同じことを尋ねてきた。

私は、日本人らしい黒髪に黒い瞳。生まれつきさらさらストレートな黒髪はちよつと自慢だが、顔は特に美人な訳ではなく、鼻は低めだし、彫りが深い訳でもない。唯一の美点といえばつつちり二重で目が大きく見えるところくらいだ。

それに比べて、目の前の二人は、日本人なら誰もが憧れるであろう外人顔。鼻は高く、筋が通っていて、各パーツがバランスよく配置されている。

異色な髪も目も、その顔立ちには違和感がなく、自然に見えた。

なんで黒髪黒目が生まれつきか聞くのだろう、と思って尋ねてみると、なんと、この世界では髪と目の色が同じ人はかなり珍しいらしい。

アナスタシアさんが、いたく私の髪と目を褒めるので、少し照れてしまった。

私としては、アナスタシアさんの容姿の方がよっぽど羨ましい。

話の流れから、思い切って自分が違う世界から来たということを打ち明けてみた。

「うん、精霊達がそう言っていたのを僕も聞いた」

「そうですか……精霊には元の世界に帰れないと言われました。これは本当なんでしょうか？」

「……そうだね、今の技術では人間を別の世界へ移動させることは出来ない。それが可能なのは、創世の女神だけだと思うけれど、精霊達はそれも無理だと言っているし……」

「やはり無理なんですね……」

しゅんとする私を励ますように、アナスタシアさんは私の手を優しく握った。

「今はあまり思い悩まないで、まずは体をゆっくり休めた方がいいわ。元気になったら、これから

のことを考えましょう」

彼女はそう言うと私をベッドに寝かせ、布団を掛けてくれた。

「そうだね。目が覚めたばかりだし、話はまた明日にしよう」

「はい、わかりました」

体はまだ休息を必要としているようで、じわじわと眠気が襲ってくる。

優しく微笑む夫婦が退室するのを見送って間もなく、私は眠りの世界に旅立った。

### 第三章 家族ができました。

翌日の朝食後。

昨日あまりできなかった話をするべく、私は部屋のソファにギルフォードさんとアナスタシアさんと向かい合って座った。

「もう体は大丈夫かい？」

「はい、もうすっかり」

「よかったわ。でも無理はしないでね」

「はい、ありがとうございます」

あの後ぐっすり眠り、夕食と朝食をしつかりたいらげた私は、すっかり元の調子を取り戻していた。

侍女長のマリーさんに手伝ってもらってお風呂に入り、気持ちもすっきりしている。

見ず知らずの私にかなり良くしてくれていることに、私は改めてお礼を述べた。

「さて、昨日の話の続きをしよう。リサちゃんも聞きたいことがたくさんあると思うしね」

「はい」

ギルフォードさんが本題を切り出したので、私もすっかり彼に向き合った。

「僕は、この国の王宮魔術師という職についていてね、リサちゃんを見つけたのはあの辺りで起こった魔術現象を調査していたときなんだよ」

ギルフォードさんいわく、私がこの世界に来た日にあの森で不思議な発光現象があったらしい。

王宮魔術師である彼は、妻とのデートがてらその調査に行ったが、現場を調べてみるも草が不自然に倒れている他に痕跡らしいものはなく、諦めて帰路につこうとしたところ、行き倒れている私を発見したらしい。

「おそらく発光現象は、場所と状況、時間的に考えて、リサちゃんがこの世界に来たことで起こったみたいだね」

納得したようにギルフォードさんは頷いた。

「精霊は私はこちらの世界に来たのは女神様が連れてきたからだと言ったんですが……」

「うん、僕も精霊に『女神様の思し召し』と言われた。精霊は嘘をつかないから本当だと思う。その『女神様の思し召し』の中には、リサちゃんが僕たちに出会うことも含まれていたみたいだ」

「……そうなんですか？」

「うん。精霊達はリサちゃんを僕たちに託していったんだ。精霊は女神の意思を人間に伝える存在でもある。昔からそういうことはたまにあるんだ。だからね——」

ギルフォードさんは、そこで言葉を区切ると隣のアナスタシアさんと目を合わせた。

「あのね、リサちゃん」

何かを決意したような表情で、アナスタシアさんが私を見つめる。

「リサちゃんが良ければでかまわないわ。……私たちの娘にならない？」

「……はい？」

突拍子もない申し出に、私は呆気にとられてしまった。

アナスタシアさんの表情から察するに、冗談で言っているわけではなさそうだが、なんと返せばいいのか言葉が出ない。

「ごめんなさいね。急にこんなこと言われたら困ってしまうわよね」

うろたえている私に、アナスタシアさんは苦笑する。

「私とギルフォードは結婚して十年以上経つけれど、子供がいないの。色々手は尽くしたのだけど、どうしてもできなかった」

笑みを浮かべながらも、悲しげに言うアナスタシアさんを支えるように、ギルフォードさんが彼女の手を握った。アナスタシアさんは、ギルフォードさんに微笑むと、再び私に向き直る。

「私もギルも子供は好きだから、とても欲しかったんだけど、お医者様にもなぜできないかわからないと言われたわ。養子をとることも考えたけど、あまり気が進まなくて……」

「うちは本家というわけではないから、跡取りは必要でなかったしね」

「でも、リサちゃんを一目見て思ったの。ああ、私達を探していたのはこの子だったって」

アナスタシアさんが、温かな眼差しで私を見つめた。

「おかしいと思うでしょ？ 自分でもなぜかわからないけれど、そのとき確かにそう思ったのよ」

「シアがそう思ったのと、精霊が君を託していったこと。無関係ではないと僕は思うんだ。不自由はさせないし、嫌なら無理強いはしない。でも、少しでもリサちゃんが良いと思ったなら、この家で一緒に暮らしてみないかい？」

夫婦の説得に、嬉しさと戸惑いが混ざり合った複雑な気持ち胸の内に湧き起こる。

アナスタシアさんが向かい側から隣に移動してきて、私の手を取った。

「この世界で私達と家族になりましょう」

アナスタシアさんの両手が、私の右手を優しく包む。

向かい側では彼女に同意するように、ギルフォードさんが穏やかに笑いながら頷いていた。

「私でいいんですか？」

「リサちゃんじゃなきゃ嫌よ？」

私の言葉にアナスタシアさんが嬉しそうな笑みを浮かべて言った。

「——よろしくお願います」

二人の真摯さに胸を打たれた私は、そう言って頭を下げた。

喜びの声を上げたアナスタシアさんに抱き締められながら、「女神様の思し召し」とやらもそう

悪くないなと思い始めていた。

その後、二人は私のことを十四〜五歳くらいだと思っていたことが判明。

元の世界で日本人が幼く見えるのと同様に、この世界でもそう思われていたみたいで、嬉しいやら悲しいやら複雑な心境だが、実年齢を理由に二人を「パパ」「ママ」と呼ぶのは免れた。落ち込んでしまった二人には申し訳ないが、「ギルさん」「シアさん」と呼ぶと約束して、どうにか納得してもらった。

そうして、私の異世界生活が始まったのだが、このときはまだ知らなかった。

この世界の食文化水準がものすごく低いことを。

病人食だと思って食べていた味の薄いミルク粥っぽいものが、実は高級食だったことを。

#### 第四章 異世界の文化を知りました。

私がクロード家に来てから一週間が経った。

午前中はシアさんにこの世界の常識やマナーを教えて貰い、午後は仕事で出かけたシアさんの代わりに侍女長のマリーさんか、執事のレイドさんに教えて貰う。そして、夜はお仕事から帰ってきたギルさんに魔術について教えて貰う、というサイクルで毎日を過ごしていた。

分かったことは、ここはフェリフォミア王国という国の王都らしい。この世界には十の国があり、フェリフォミア王国はその中でも一番豊かな国だそうだ。

王国は海に面し、また国内に山脈があるため、資源に恵まれており、地理的にも流通が盛んらしい。また、王都は学術都市でもあり、国内外問わず学生や学者、研究者が集まってくるとのことだ。私が元の世界のことを話すと、フェリフォミア王国の気候は、日本に似ているという言葉が返ってきた。冬はロシア並みの極寒になるとかじゃなくて良かった。

ギルさんに聞いた所、この世界は地球のような球体ではないらしいのだ。そのためか、地方によって時差と四季の差はほんの少しあるものの、地球のように北半球と南半球の季節が真逆だとか、日本が昼のとき、地球の反対側のブラジルは夜、とかいう激しい時差などは無いらしい。

そして、元の世界との一番の違いが、魔術があることだ。

魔術には大きく分けて精霊魔術と魔道魔術の二種類がある。

精霊魔術はその名の通り、精霊に力を借りる魔術だ。そのため、使うにはまず精霊が見えることが第一条件で、更に彼らと意思の疎通が出来なければならぬらしい。

驚いたことに、精霊は誰にでも見えるものではないということだった。ギルさんが当たり前のように精霊のことを話していたので、つきりこの世界の人は皆見えるのだと思っていた。

この世界の住人でも精霊を見ることが出来るのは、十人に一人くらいだという。精霊と意思疎通がはかれる私に、ギルさんは王宮魔術師にならないかと、熱烈にスカウトしてきた。将来仕事にするのもいいかもしれないと思ったが、ひとまず保留しておく。

王宮魔術師であるギルさんは、もちろん精霊魔術を使える。

一般的に精霊魔術を使え、国立の魔術学校を卒業した人を魔術師と呼ぶそうだ。

一方、魔道魔術は魔術具を媒介<sup>ばいはい</sup>に発動するもので、魔術具さえあれば誰でも使えるらしい。魔術具は基本的に生活必需品が多い。冷蔵庫をはじめ、元の世界にあつたものは一通りある。生活には不便しなさそうだ。

そして、言語は基本的に日本語が通じるが、文字は全く違っていた。ローマ字のように母音と子音を組み合わせるよう表記するようだ。これは文字の読み書きが出来るようになるまで、かなり時間がかかるかもしれない。当面は手製の五十音表を持ち歩かなくては。

文化的には近代ヨーロッパっぽい。服もドレスだし、装飾とか建築様式も似ていると思う。個人的に昔のヨーロッパの家や風景が好きだったので、楽しい。服もゴテゴテしているものでなければ、大丈夫だ。ちよつと豪華なワンピースと思うようにしている。

余談だが、身に着けるものはすべてシアさんが用意してくれている。シアさんの実家はこの国有数の大商家で、シアさん自身も「シリルメリー」という服飾会社を経営しているらしい。本人は好きなことを好きなようにしているだけと謙遜<sup>けんそん</sup>しているが、この世界のファッションリーダー的存在のようだ。

というわけで、おおむね快適な異世界生活だが、一つだけ不満がある。

それは、食事だ。

クロード夫妻に拾われてから数日、病人食だと思つて食べていた、味のほとんどないミルク粥み

たいなものが高級食だと判明し、パンはありませんかと言つたら、石か！ とツツコミたくなるほどのカッチコチな茶色の塊が出てきた。

その上、こちらの食事は基本的に塩味と胡椒味と砂糖味の三種類しかない。素材の味を生かすと言えば聞こえは良いが、現代日本人の肥えた舌には、一週間が我慢の限界だった。

居候<sup>いこう</sup>の立場であることを忘れ、怒りに駆られた私は思わず叫んでしまつていた。

「なんで？ 文化つて普通は食から発展するんじゃないの？ なんでここのご飯はこんなにマズいのー！」

## 第五章 食卓事情を知りました。

我慢の限界に達した私の嘆きの声は、クロード家の朝の食卓に響き渡つた。

私の叫びにギルさんとシアさんはポカンとした表情をし、給仕のために控えていた侍女長のマリーさんも、執事のレイドさんも一様に驚いた顔をしていた。

ハッと我に返り、素がモロに出てしまつていたのに気付く。

ヤバい。ここはクロード家の朝の食卓の席。そんな場で不満の声を上げてしまった。これまでのい感じで築いてきた人間関係が……

でも、このマズいご飯をこれからもずっと食べていかなきゃならないなんて、きつ過ぎる!! あ



あ、醤油と味噌が恋しい。

「あの、リサちゃん？ このご飯でもしかしてリサちゃんのいた世界のご飯とは違うの？」  
いきなり感情的になった私に気を遣ってか、シアさんが控えめに聞いてくる。

「……えー、はい。残念ながら……」

取り繕うのも今更な気がして、この機会に正直に話すことにした。

朝食を終えた後、ギルさん、シアさん、侍女長のマリーさん、執事のレイドさんに話を聞いてもらう。  
「私が住んでいた日本という国は、世界から見ても食文化が進んでいた国でした」

寿司、天ぷらにすぎ焼き、うどん。カレーもラーメンも日本で進化を遂げ、今では日本の立派な国民食。古くからあるお漬物に納豆に梅干しだって、今、目の前にあったなら、ご飯何杯でも食べられる。……ああ、白米がないんだって。

「この国の主食はパンですよね？」

「うん。この国もそうだけど、近隣の国もパンが主食だね」

「そうですか……私のいた世界のパンはこちらのものととは違って、ふわふわなんです。それに、私の生まれ育った国の主食はパンじゃなくてお米でした」

「おこめ？」

ギルさん達はみな一様にきよとんとした。

「……ないんですね、お米。では、こちらでは麺って食べないんですか？」

「……めん、とは？」

「……あー、麺というのは主に小麦粉などを水で練って紐状にしたもので、茹でてスープや具と一緒に食べます。原料もお米を粉にしたものや、他の穀物を使ったものもありますね」

「へえ〜」

「あと、調味料なんですが、こちらではどういったものがありますか？」

「どうって、お塩とお砂糖、あとは胡椒だね」

「他は？」

「えっと、それだけなんだけど……」

なんとなく予想はしていたが、落胆を隠せない。

「いや、あの薄味から予想はしてましたが……」

「その様子だと、リサちゃんの世界には調味料がたくさんあるんだね？」

「はい。普段使うものでも数十種類は」

「数十っ！」

「そんなにあるの？」

「ありますねえ」

「それを聞かされると、この世界と違うっていうのも頷けるね」

「本当ですよ、ギルさん。この先どうしようか……」

「あ、ちなみにこの世界で食文化が進んでいる国ってどこなんですか？」

私の一縷の望みは、ギルさんの台詞によって粉々に打ち砕かれることとなった。

「この国、フェリフォミアだね。王都は学術都市でもあるから、人の出入りは激しいし、大きい商會があつて交易も盛んだからね」

ちよつと得意気に話すギルさんには申し訳ないが、出来ればそうあつてほしくはなかった。

要はこの国の料理が、この世界の食の最高ランクということだ。

まさかこのクロード家での料理が、国の中で特別マズいということではあるまい。

「なるほど。あと最後の質問なんですが、お菓子って食べないんですか？」

「……おかしつていう料理はこちらにはないわね」

いえ、料理ではなく、どちらかと言えばジャンルです、シアさん。

私はとどめの言葉に打ちのめされ、ソファにがっくりと沈み込んだ。

「……リサちゃん、大丈夫？」

質問の答えが返ってくる度に落ち込んでいく私を、ギルさんは気遣つてくれているみたいだ。

うん。これは自分でもうにかするしかないのだろう。決めた。

「ギルさん、シアさん」

「は、は」

「今日からクロード家のご飯は私が作ります！」

## 第六章 厨房を拝見します。

クロード家はすごく広い。家の中を全部見たわけではないが、私が使わせてもらっている部屋だけでも三十畳くらいある。

クロード家にはそのくらいの広さの部屋が他にもまだまだたくさんあるらしい。私が住んでいた1Kのアパートが、この部屋のクローゼット程度であることは考えないようにしよう。

それもそのはず、クロード家はこの国の侯爵位にあるのだ。当主はギルさんのお兄さんが継いだらしいので、この家は分家にあたる。

本来なら分家であるギルさんには爵位はないはずなのだが、彼の功績こうせきと高い税金を納めていることが認められ、新たな侯爵の位を与えられているそうだ。

この国の貴族階級の基準はかなりシビアらしい。基本的に貴族階級には、一般人よりも重い納税の義務があり、それを守らないと爵位は剥奪はくたつされる。

更に、国への貢献こうげん、例えば領地での収益や技術革新、また政治施策の功績なども厳しく査定されるらしい。フェリフォミア国はこうして長年、立憲君主制で善政を敷いてきたのだそうだ。

つまり貴族階級は特権を持っているが、その責任もまた大きく、甘い汁ばかりすすってはい生き残れないということだ。

そんなクロード家のまだ見ぬ厨房へ、侍女長のマリーさんに案内されてやってきた。

備え付けの魔術具コンロ六口と業務用っぽい魔術具冷蔵庫、同じく業務用っぽい魔術具冷凍庫、水道も魔術具だ。広さも設備も申し分ない。

「マリーさん、いつも料理は誰が作ってるんですか？」

そういえば今まで、聞いたことがなかった。

「お料理は料理担当の侍女が交代で作っています。作るといってもスープと主菜だけで、パンは王宮御用達のパン屋から届けてもらっていますよ」

なんと、あのカチコチパンは王宮御用達だった！

この国の王様もあの硬いパンを食べるのか……。国の最高権力者でさえ、何も文句を言わないなんて不思議すぎる。この世界の人はどれだけ強靱な顎を持っているんだろうか。

あのカチコチパンを食べ続けたら、いつか顎が進化してしゃくれてしまいそうだ。

……もういい。この世界の食文化には驚かないことにしよう。

うん、私がこの世界の食の開拓者になるんだ。すべては私がよりおいしいご飯を食べるため。

自分自身に言い聞かせるように決意を固めた後、マリーさんをお願いして食材を揃えて貰うことにした。

マリーさんはなぜかやる気満々。こちらとしては大いに助かります。

日本人がマリーさんを見たら、料理が出来ないとは絶対に思わないだろう。ちよつとぼつちやり

して、白い割烹着を着て学食とかで働いてそうだもん、マリーさん。それで、こつそりから揚げとかおまけしちゃう感じ。ああ、から揚げも食べたい。うん、今度作ろう。

とにもかくにも、今考えるべきことは、約二時間後に控えている昼食までに何が作れるかだ。本当はパンの改良から始めたいが、酵母から作らなくてはいけないので時間がかかる。ミルク粥っぽいものの中に入っていたのが小麦だったことを考えると、食べる習慣がないか、お米そのものがないのだろう。『おこめっ』と首を傾げていたし。

ということは、今、作れる主食は消去法で麺になる。

麺か……。うどん、そば、ラーメン、パスタ。うどんとそばは醤油がないから、却下。ラーメンもかん水（ラーメンを作るときに必要なもの。かん水を入れないとラーメンにならない）がないから、こちらも却下。

となると残るはパスタだ。小麦はパンにも使っているし、卵らしきものもスープに入っているのを見たことがある。あとは、塩と水。決まりだ、パスタしかない！ どうか今はパスタしか作れない！

そうこうしているうちに、マリーさんを筆頭に侍女さんやレイドさん、庭師のおじさんなど、クロード家の使用人総出で食材を厨房に運んでくれた。居候の私なんかのために、本当にありがたいことです。

おいしいご飯を作ります！

「マリーさん、侍女の皆さん。ではこれからパスタという料理を作ります」

37 異世界でカフェを開店しました。

「ばすた、ですか？」

マリーさんも侍女さん達も初めて聞く料理名に首を傾げている。

「それほど難しいものではないので、一緒に作りましょう」

「はい！」

「頑張りますね」

やや困惑している面々に笑顔でそう言うと、元々やる気満々のマリーさんを筆頭に、賛同の声が返ってくる。そして、私を囲むように周りに集まってくれた。

まず、調理台に小麦粉の山を作り、てっぺんを凹ませ、そこに卵を割り入れて混ぜる。そこに塩を溶かしたぬるま湯を混ぜていき、五分くらい捏ねる。

同じ工程をマリーさんにもしてもらおう。クロード家の人たちみんなに食べてもらいたいから、多めに作っているのだ。

生地を二十分くらい寝かせる。こちらにビニール袋はないので、乾燥防止のためにボウルに入れ濡れ布巾をかぶせておく。

その二十分の間に皆さんが運んできてくれた食材を吟味する。マリーさんや侍女さん達に食材の名前を教えて貰いながら、ちよつとずつ齧って味を確かめていく。今日の Pasta に使えそうなのは、マローという名前の赤いナスのような形のトマト味の野菜。それと、イチヨウの葉の形をしたザラナというほうれん草のような味の野菜。

そして、トトという名前の鳥肉。トトは一般的に食べられている肉らしく、Pasta に使った卵も

この鳥の卵だ。

今日は使わないが、異彩を放っていたヤシの実のようなバスケットボール大の実は、ミルクと呼ばれていて、その名のとおり中身も牛乳そのものだった。熟すと脂肪分が増すらしく、これでバターも生クリームもチーズも作れることに一人喜ぶ。侍女さん達には全く理解してもらえないのが歯がゆい。

他にも使えそうな食材がいろいろあったが、とりあえず今は置いておく。

良い頃合いになり、寝かせていた生地を平たく広げ、三センチ位の正方形にカットしていく。カットした生地の真ん中をきゅつと指で摘まむ。すると蝶々のような形になる。これはファルファッレと呼ばれる Pasta で、家でも簡単に作れるので、よく作っていた。

初めて見る Pasta に戸惑っていた侍女さん達も、蝶々の形のそれを可愛いと思ってくれたらしく、きゃっきやと楽しんで作ってくれた。女の子が可愛いものが好きなのは異世界共通なのだ。

侍女さん達の手伝いのおかげで大量にできた Pasta を、沸騰したお湯で茹でる。

その間にソースを作る。鳥肉と、ザラナ（ほうれん草もどき）を適当な大きさに切って、マロー（トマトもどき）の皮を湯剥きして、こちらは二センチ位に切っておく。

鍋に油をひき、小麦粉をまぶした鳥肉を投入し、火が通ったところで、ザラナも軽く炒める。その中にマローを入れ、形が少し崩れるくらいまで煮込む。塩胡椒で味付けをしたら、ソースの出来上がり！ この中に茹でた Pasta を入れて絡めたら完成だ。

実は、マローを鍋の中に入れたときに、侍女さん達からどよめきの声が上がった。この世界では、

果物として生のまま食べるのが普通らしい。火を通して食べる習慣がないものを鍋に投入した私に驚いたようだ。

その話を聞いて不安になり、慌ててマローのソースを味見したが、やや甘みが強いトマトソース味になっていて、ホツとした。

何はともあれ、この世界に来て初めて食べるちゃんとしたご飯！ ただのトマトソース（もどき）パスタにこんな感動するなんて……

完成したパスタを侍女さんに手伝ってもらって食堂に運ぶ。そこには既にギルさんとシアさんが座って待っていた。

「すごくいい匂いがしてるから、待ちきれなくて〜」

「私も匂いにつられて、時間より早く来ちゃったわ」

期待大の二人が受け入れてくれるか、少し緊張しつつテーブルにパスタを置く。

私は一応料理の説明をすることにした。

「私の世界でパスタと呼ばれる料理です。下にある蝶々のような形をしたものがファルフアツレというパスタで先ほど説明した麺に分類されます。上にかかっているのが鶏肉とザラナをマローのソースであえたものです」

「この少し黄色みがかっているのがパスタっていうものなのかい？」

「はい、そうですよ」

「すごい綺麗ね！ ねえ、さっそくいただきますしようよ！」

ギルさんはもつと質問したそうだったが、シアさんは待ちきれないよう催促する。

この世界ではいただきますの挨拶の代わりに、女神と精霊に感謝のお祈りをして食事始めるのだが、二人はいつもよりやや早口気味にお祈りを終えると、わくわくした表情で一口食べた。

「おすごし！」

二人は揃ってそう言うと、後は黙々と食べ続けた。

どうやら口に合ったようで、ホツとつつ、私もパスタを口に運ぶ。うん、いつも作るトマトソースのパスタと同じ味だ。

私が半分程食べたころには、二人とも完食してしまっていた。そして、二人は口の周りをマロー色に染めたまま、感想を言い始めた。

「こんなおいしいもの初めて食べたよ〜」

「このパスタっていうの少しもちっとしてて、ソースともすごく合うし、そもそもマローをこんな風に食べたの初めて！ とってもおいしいわ！」

二人の満足げな様子を見て、居ても立っても居られなくなったのか、給仕に勤しんでいた侍女さん達もそれぞれです。

「君たちもここは良いから、早く食べてきなさい」

見かねたギルさんがそう促すと、彼女たちも足早に昼食をとり部屋を出て行った。

その後も、ギルさんとシアさんの感嘆の声は続き、さすがの私も恥ずかしくなったのだが、ありがたく受け取っておくことにした。

そして、パスタを食べに走った侍女さん達をはじめ、使用人の方々からも感動の言葉を頂いた私は、その後、正式にクロード家の料理担当となったのだった。

## 第七章 異世界の食文化発展について考察しました。

そもそも日本には六、七十年くらい前まで冷蔵庫はなかった。そのため、食材の保存方法といえは、乾燥させるか、塩漬けにするしかなかった。そんな背景のもと、発酵食品である味噌、醤油、納豆などの日本の食文化に欠かせない食材が生まれた。

だがこちらの世界には、魔術具があった。食材の保存方法においても、こちらでは魔術具の発展により冷蔵・冷凍保存が早く可能になったため、元の世界で試行錯誤の結果生まれた保存食品は、こちらでは生まれなかったのだ。

以上はあくまで私の推測だが、ギルさんに聞いた魔術具発展の歴史から考えるに、おおむね合っていると思う。便利であるのはいいことだが、不便から生まれるものも多いということだ。うん。パスタを披露した昨日から、クロード家の主食はパスタになった。侍女さん達も作り方を覚え、積極的に手伝ってくれている。とはいえ、主食がパスタだけなのは心もとない。そこでふわふわもちもちのパンを食べるべく、今日からパン酵母を作ることにする。

「リサ様、本日もお手伝いさせて頂きますわ」

「マリーさん、毎日やって頂かなくても大丈夫ですよ。色々とお忙しいんじや……」

「いえいえ！ ぜひやらせて下さい！ お手伝いなんておしつけがましい言い方かもしれませんが、リサ様の作るお食事は本当にどれもおいしいので、傍でお勉強させていただきたいのです」

「おしつけがましいなんてそんな！ いつも手伝ってくれてこちらこそすぐ助かってますよ。では今日もお願いします」

マリーさんは今日も隣でアシスタントしてくれるらしい。清楚な侍女服に白いエプロンをつけて、やる気満々でスタンバっている。

かわいらしい様子を微笑ましく思いながら、私は材料の物色を始める。

昨日持ってきてくれた食材の中から、リングに似た果物を見つけた。リルの実というらしく、味はオレンジだった。この果物から酵母を作ることにする。

「マリーさん、今日は酵母を作ります」

「こうぼ、ですか」

「はい。酵母というのは、パンを作るのに使うのですが、私がいた世界と比べると、こちらのパンってすごく硬いですよ」

「そういえば、以前もおっしゃってましたね」

「そこでパンをふわふわにする素っていうのが、これから作る酵母なんです」

「ふわふわのパンというのが私には想像つきませんが、リサ様が作るのですしたら、それはそれはおいしいのでしょうかね！」

今まで作った料理のおかげか、私が作るふわふわのパンへのマリーさんの期待値は高いらしい。早く食べたいと言わんばかりに、目を輝かせている。

「では始めましょうか」

「はい！」

まず煮沸したガラス瓶を用意する。そこに皮つき、種つきのままために千切りにしたリルの実を隙間なく入れる。その中に蜂蜜を大さじ一杯と、一度煮沸して冷ました水を入れ、コルクの蓋ふたをしっかり閉め、密封する。

「これで終わりです」

「え？ もう終わりですか？」

マリーさんは拍子抜けしたような声を上げた。

「終わりと言うと、少し語弊ごへいがありますね。準備は、終わりです。あとは置いておくだけなんです。が、マリーさん、この家で一番暖かい部屋はどこですか？」

「暖かい部屋ですか？ それでしたらサンルームだと思いますけど……」

「では移動しましょう」

突飛とつひな私の問いにマリーさんは疑問で頭がいっぱいのようなだったが、私をサンルームへ案内してくれた。

今日は天気も良く、サンルームの中はかなり暖かい。ガラス張りなので、庭が見渡せるようになっており、ウッドデッキから直接外に出られるようになっていていい。

「このテーブルを使ってもいいですか？」

「はい、大丈夫ですよ」

お茶を飲んだりするためなのか、テーブルセットが備えてあったので、それを使わせてもらうことにする。

厨房から運んできたガラス瓶をテーブルの上に並べ、直射日光が当たらないように布をかけておく。

「あとは毎日混ぜて空気を含ませてあげたら、数日で出来ですよ」

「あの、リサ様、もしかしてここに置いておくのですか？」

「はい、そうですよ」

「ええ！ 腐くっちゃいますよ!？」

マリーさんはぎよつとしている。

「ふふ。まあ、マリーさん。だまされたと思って楽しみにしてくださいよ」

「はあ」

たぶんこの世界の人からすると、発酵はつこう＝腐くるなんだろうな。予想通りのリアクションをしたマリーさんは、半信半疑のまま、とりあえずは見守ってくれることにしたようだった。

翌日、マリーさんと一緒にサンルームに向かう。

掛けていた布を取って、瓶の蓋ふたを開ける。炭酸のペットボトルを開けたときのようなシュワツという音がかすかに聞こえた。

「マリーさん、少し匂いを嗅いでみてください」

一度、自分で匂いを確かめてから、彼女に差し出す。

「あら？ 何というのでしょうか。リルの実ともまた違った香りがあります」

「そうなんです。これは腐敗臭ではなく、酵母が発酵している匂いなんですよ。まだ一日目なのであまりよく見えないですが、シユワシユワしたのがもっと多くなったら出来上がりですね。あと二、三日といったところですかね」

マリーさんは腐っているのではないことに安心したようだが、どうやって使うのかまるで見当がつかないらしく、目をしばたたかせていた。

様子を見ること数日。

いよいよ待ちに待ったふわふわのパンが作れる。酵母はちゃんと育ててくれているが、思ったように膨らんでくれるか、少し不安もある。

いつものようにマリーさんに手伝ってもらうことにして、パン作りにとりかかる。

パンの作り方（カチコチの方）を知っていたマリーさんは、一次発酵と二次発酵と手間をかける作り方に終始疑問を持っていたが、オーブンから漂う香ばしい匂いと、ふんわりと焼きあがったパンを見て納得したようだった。

できたてのパンを、私とマリーさんで一個ずつ試食してみる。

それぞれ一口かじると、ほぼ同時に「ほう……」とため息が漏れた。私は安堵の、マリーさんは感嘆のため息だった。

「どのように酵母を使うか疑問でしたが、まさか生地があんなに膨らむとは思いませんでしたわ」

「初めは想像つきませんよね」  
それからマリーさんはあつという間にパンを食べ終え、興奮気味に「早く旦那様達にも召し上がってもらいましょう！」と言い、テキパキと食事の支度に取り掛かった。

その日はマリーさんに急かされて、いつもより早く食卓に料理がならんだ。  
献立はさつき焼いたパンとマローのミネストローネ、鳥の香草焼きに蒸し野菜のサラダだ。

「今日のご飯は何だい？ リサちゃん」

シアさんをエスコートして、ギルさんが食堂にやって来る。

二人はいつもの席に座り、並んでいる料理を見て驚いた表情を浮かべた。

「リサちゃん！ これってもしかして……」

シアさんは、目に期待を滲ませながら私を見る。

「はい、これが私の世界のパンですよ」

実は先日私の世界のパンのことを話した後、二人が食べてみたいと言っていたのだが、ようやくその希望に応えられる日がやってきたというわけだ。

食前のお祈りをした後、二人はパンを手にとった。

「おおー！」

「柔らかいわー！」

二人はまず未体験の感触に驚いたのか、その弾力と柔らかさを堪能している。



「千切った方が食べやすいですよ」

私が千切ってみせると、二人も同じように千切り、更に驚いている。

そして同時に口に含んだ。

「……」

無言のまま、二人はじつくりとパンを味わっている。二人とも何も言わないので不安に思ったが、表情がすべてを物語っていた。ともに顔が綻ほころんでいる。

元の世界のパン屋さんには遠く及ばない、手作り感満載のパンだったが、こちらの世界のパンに比べれば段違いだ。

「これがパンなのか!？」

「ふわふわだわ!! それにほんのり甘みもあって、すごくおいしい!」

パンを呑みこんだ二人は、口々に感想を述べ始めた。

二人同時に捲まくし立てるのであまり聞き取れなかったが、褒めてくれていることだけはわかる。

二人がそんな風に笑顔でおいしいと言って食べてくれたことが、私は嬉しかった。

おいしい食事が人を笑顔にするのは、どこの世界でも共通なのかもしれない。

## 第八章 小さい子に懐なつかれました。

パン作りに成功した翌日。

朝食を食べた後、私は部屋にこもり、これからのことを考えていた。主食では、パスタとパンが作れるようになったが、まだまだレパートリーが少ない。

羊皮紙に足りない食材を書き出す。まず日本人の主食である米、そして調味料は醤油、味噌、酢、酒、唐辛子。調味料が基本の「さしすせそ」のうち、塩と砂糖しかないことが辛い。先行きが不安だ。

持っていた羽ペンをテーブルの上に投げ出し、椅子の背もたれに寄りかかる。見上げた天井には蜘蛛くもの巣ひとつ、シミひとつない。高級そうなシャンデリアには、精霊まじなが……って、えっ!?

べしゃ、という音と共に私の顔の上に何かが落ちてきた。目、鼻、口を完全に塞ふさいだそれを右手で掴むと、それはジタバタ暴れた後、ふいーと飛んでテーブルの上に降り立った。

「……な、何?」

顔に痛みはないが、今まで体験したことのない感触に驚いて、テーブルの上を見る。

「あ、あのごめんなさい! わざとじゃなくてっ」

緑色の髪のちっちゃな女の子が私を見上げてあたふたしている。私の顔面に落ちてきたのはどうやらこの子だったらしい。



「あれ？ 確か、君って森で出会った精霊さん……？」

森の中でさまよっていた私を、街道まで案内してくれた精霊達のリーダー格だった子だ。

ギルさん達に拾われて、この家に来たときにはいなくなっていたので、てっきり森に戻ったものだと思っていた。

「ギルさんが精霊に託されたって言うていたから、あなた達はてっきり森に帰ったと思っただけ……」

「……実は私だけついて来てたんです」

「え？ そうだったの？ なんで？」

「心配だったんです……突然この世界に連れて来られて、不安じゃないわけじゃないから、困っていたらどうしようと思っ……」

自身の髪色と同じ緑色の服をぎゅっと握りしめた彼女は、気遣わしげな表情で私を見上げた。

そういえば、街道に出てすぐ倒れてしまったから、精霊達にお礼を言うこともできなかった。

「そうだったの。あのときは案内してくれてありがとう。おかげでクロード家にお世話になることが出来て、こうして元気でいられる。あなたたちのおかげね。本当にありがとう」

「いえ、良かったです！ ……もしかしたら嫌われてるんじゃないかと思っ……だったので、そう言っ……て貰えただけで嬉しいです」

思い出してみると、彼らに会ったときは、とにかくこの世界に来たことに戸惑っ……ていて、きつ……くあたってしまったような気がする。彼女が嫌われてると思っ……たのも無理はない。

そんなつもりはなかったんだけど、今思うと申し訳ないな。

「ごめんね、私、嫌な態度を取ってしまったよね。精霊に会ったことなんてなかったから、びっくりして……でも、決して嫌いなわけじゃないよ！今はすごく感謝してる」

「良かったー」

彼女は安心したように微笑んだ。

「ところで、どうして上から降ってきたの？」

先程の突然の襲撃を思い出して尋ねてみると、彼女は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「……あ、あれは、シャンデリアからあなたを窺<sub>のぞ</sub>っていたら急にこちらを向いたので、驚いて足を滑<sub>すべ</sub>らせてしまって……。決してわざとではないんです！」

猿も木から落ちる、ならぬ、精霊もシャンデリアから落ちる。

恥ずかしそうにしている彼女には悪いが、その状況を想像して、少し笑ってしまった。

彼女はますます赤くなってしまったので、私は話題を変えることにした。

「私に何か話したいことでもあったの？」

「……あっ、あのですね……困っているようだったので、力になればと思ったんです。私、精霊だから知ってることも多いのです！魔術も使えますし！」

必死に私に協力したいと訴える彼女。なんか、私好かれてるよね？

ギルさんから、精霊が見える人は精霊から好かれやすいと聞いていたけど、私もそうみたいだ。

いや、嫌われるより良いんだけども。

「ありがとう、実は困っていたところだったからすごく嬉しいよ。そういえばあなたは、名前は？」

「名前はないです」

名前がないって……精霊は名前がないものなのかな？じゃあなんて呼んだらいいんだろう。

「あの、もし良ければ名前を付けてください！」

目をキラキラと輝かせ、彼女は私を見つめてきた。

「私なんですが、名前付けていいの？」

「はいです！」

うーん……急に名前と言われても……

性格が分かるほどまだ接してないから、外見上の特徴でしか名前をつけられない。

うん、シンプルに緑色の髪にちなんで……

「じゃあ、バジルってどうかな？」

安易だけ髪の色から連想してみた。浮かんだ名前が食べ物つてどれだけ食い意地張ってるんだ私、と思わなくもないが、響きも良いし、可愛いと思うんだけど……

彼女は「バジル……バジルかぁ」と頬に両手をあてながら何度も呟いて、微笑んだ。どうやら気に入ってくれたみたいだ。

「そういえば私も自己紹介してなかったよね？黒川……じゃないや、リサ・クロカワ・クロードです。よろしくね、バジルちゃん」

「こちらこそよろしくお願います！マスター」

「……え？ マスター!？」

「はい、名前をつけて貰ったのでマスターです!」

驚いた私に一瞬バジルちゃんはきょとんとして答える。

「そういうえばジルさんが精霊魔術は精霊と契約しないと使えなくて、契約は名を介してどうのこうのって言うていた……」

もしかして私、バジルちゃんと契約したってこと？

バジルちゃんに聞いてみると、その通りだった。

「マスターと契約できて嬉しいです、とにこにこしているバジルちゃんに今更なかったことにしてとは言えない。彼女は何か困ったことがあったら助けます! と意気込んでいます。」

腹を決めた私はそんな彼女に、さっそく悩んでいたことを相談してみることにした。

「この世界にお米ってあったりする？」

「ありますよ」

——え!？」

なんか意外と早くお米ゲットかも!？」

## 第九章 精霊と戯れます。

「お米あるのね! じゃあ、大豆は? それに調味料があれば……。とりあえず唐辛子ってあるの?」

あとチヨコレート、いやこの場合カカオ豆か……。あとは……」

お米があると知った私のテンションは急激に上がり、他の食材の手がかりも掴むべく、興奮を隠さぬままバジルちゃんに詰め寄っていた。

迫る私に、バジルちゃんはうろたえて、後ずさる。

「マ、マスター! とりあえず落ち着いてください」

そ、そうだね、バジルちゃんの言うとおりに落ち着こう。

「名前が違うので、マスターが望んでいるものと全く同じとは言えないですが、マスターのいた世界と似たような食材はほとんどありますよ」

「そうなの?」

「はい! 女神様が教えてくれたんです! ……あ、これって話しちゃダメだったのかな……?」

「女神様が?」

「女神様は私たちの母親のような存在で、この世界を作った偉大な方なんですよ」

「へえ」